The Japan Association of College English Teachers (JACET)

I

転移修飾 (Transferred Epithet) ——語感と構文

大森 裕實
愛知県立大学

キーワード：換喩，転移修飾，軽動詞構文，結束性
Keywords : hypallage, transferred epithet, light verb construction, coherence

1. はじめに

かつて夏目漱石は、煩悶を繰り返した英国留学において、進化論の呪縛から解放された境地を「私は軽快な心をもって陰鬱な倫敦を眺めることができた」と「私の個人主義」(学習院での講演録) の中で記したが、the gloomy city of London は「転移修飾 (transferred epithet)」と呼ばれる言語現象である。同様の事例として、I drank a hasty cup of tea.[= I drank a cup of tea hastily.]も一般的に指摘されるが [柴田・藤井 (1985: 203)]、そのような言語表現に関心を払うことなしでは、英語圏のいわゆる "educated people" がもつ英語らしさを感得することは到底望めない。

また、最近再発見した英語文に This pleasure ..., and has nothing to do with any desperate need of your own. (B. Russell, *The Conquest of Happiness*, 1930) というものがあったが、これも下線部は[with what you need desperately]と解釈するのが自然であろう。ただし、desperate need (死に物狂いの必要性) と聞いても、言語学者や辞書編纂者でもなければ、それほど意味関係の違和感を覚えることのない卑近な例 (日常的複合語) も多数存在する—— their married life (⇔*life is married)/ liberal education/ dead fence/ criminal court/ sick room/ the poor law 等、枚挙に暇がないが、よく観察してみると、修飾語と被修飾語 (名詞句の head) との意味的結合度合いに違いがあるようだ。

「転移修飾 (transferred epithet)」を単なる英文学的修辞という枠組みではなく、言語学的枠組みにおいて、この言語表現を捉えた Robert Hall (1973)の洞察は看過できない。また、それを構文論として扱う黒田航(2011)も示唆的内容に富む。加えて、最近の認知言語学的メタファー論からの分析も進んでいる。今回のシンポジウムの魁として、転移修飾を採り上げ、その分析と接近法を提示する。

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers (JACET)

2. 転移修飾（transferred epithet）とは何か——その実態を分析する

2.1 一般的定義と特徴

英語学研究において、こうした修辞的事項に詳しい時代に編纂された『英語学辞典』（研究社）及び『新英文法辞典』（三省堂）に依拠すれば、*Transferred Epithet* とは「Hypallage [代換・転喩]の特殊なもので、英語では、いわば hypallage of the adjective——本来属すべき語から離れて、形式上他の語の修飾語として用いられた形容詞及びその用法」と大括りで定義することは一応できる。

この言語表現の典型的事例は本稿第一節において指摘したように、"I drank a hasty cup of tea." のような構文だが、この "a hasty + N" 構造を BNC100 万語サンプル Corpus (BYU-BNC) で検索してみると、 316 例を確認することができた（hasty meals の出現頻度が高い）—— 文体的分類では、**Fiction** (134) / Newspaper (39) / Non-Acad (37) / Acad (31) / Magazine (15) / **Spoken** (2) ［(　)内の数字は token 数］。この結果から、*Transferred Epithet* は「極めて文語的・情緒的・強意的表現である」という傾向を看取することができ、当該表現に対して英語学習者が漠然と抱いている印象の正当性が具体性をもって証左される。

ここで、いくつか代表的な散文事例を提示しておく。

(1) Her cheeks are streaming with tears./ What ignorant sin have I commit[t]ed?
（知らないうちに一体どんな罪を犯したのだろう） (Shakespeare, *Othello*)

(2) Let us speak our free hearts each to other.
（お互い心の内を自由に話そう） (Sh., *Macbeth*)

(3) I led them on in this distracted fear.
（この恐怖の中に彼らを気も狂わんばかりと陥れた） (Sh., *A Midsummer-Night's Dream*)

(4) They had killed each other in their drunken wrath.
（彼らの酔いに任せた怒りで殺し合った） (Stevenson, *Treasure Island*)

2.2 Hall (1973) の言語学的示唆

米国の言語学者 Robert Hall (1911-1997)[1] が言語学誌 *Linguistic Inquiry*, vol.4 (1973) に Squibs & Discussion として発表した P. G. Wodehouse という作家における転移修飾についての考察は、従来の修辞学的技法としての転移修飾を言語学的構文論として扱った示唆に富む論考であると考えられる。もっとも、それに 60 年も先行して Otto Jespersen (1860-1943)が文法的観点から転移修飾を *Modern English Grammar* II (1913)の Shifted

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers (JACET)

Adjunct の項で分析していることは指摘しておかねばならない。

Hall (1973)の指摘する Wodehouse からの典型的事例からいくつかを抜粋する。

(5) I balanced a thoughtful lump of sugar on the teaspoon.

⇔ I thoughtfully balanced a lump of .../ I was thoughtful, and I balanced a lump of sugar on the teaspoon.

(6) He was now smoking a sad cigarette and waiting for the blow to fall.

⇔ He was now sadly smoking a cigarette and waiting for the blow to fall.

(7) ... and though somebody had opened a tentative window or two, ...

⇔ ... and though somebody had opened a window or two tentatively, ...

(8) As I sat in the bath-tub, soaping a meditative foot ...

⇔ As I sat in the bath-tub, soaping a foot meditatively ...

(9) ..., he slipped a remorseful five-pound note into the other's hand.

⇔ ..., he remorsefully slipped a five-pound note into the other's hand.

(10) As he turned from waving a genial hand at the departing car ...

⇔ As he turned from genially waving a hand ...

(11) The first thing he did was to prod Jeeves in the lower ribs with an uncouth forefinger. ⇔ ... to prod Jeeves in the lower ribs uncouthly with a forefinger.

これらの事例から、次の 2 つの分析が提示される。

[分析 1] We might interpret the adjective, in the constructions Adjective + Noun, as equivalent to an adverb transferred from its position modifying the verb of the clause.
(形容詞+名詞構造において、当該の形容詞は節/文の述語動詞を修飾する位置にあった副詞が転移したものと等価であると解釈できる) [Hall (1973: 93)]

[分析 2] These [Adverb + Verb constructions], in their turn, involve a reference to the subject of the verb in each instance, ...
(副詞+動詞構造がそれぞれの事例において動詞の主語に対する言及を含む⇒これを敷衍すれば、転移修飾も同様に主語指向性をもつという解釈を許す) [Hall (1973: 93)]

特に[分析 1]に基づく構文化を形式化して示せば、He was sad. + He was smoking a cigarette.⇒ He was sadly smoking a cigarette.⇒ He was smoking a sad cigarette.という生成段階を認識することができる。ここから分かることは、この SVO という単純な文型のなかに 2 つの命題、すなわち 2 重判断が共存していることである。安井（1976: 176）の

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers (JACET)

表現を借りるなら、「これは、転移修飾語を含む表現が非常に圧縮された表現であり、表面的な形式と、意図されている意味との間には、いくつかの中間段階が介在している」ところに本質的特徴を見出だすことができる。

2.3 英語類似構文との混成(hybrid)の可能性

いわゆる軽動詞構文（Light Verb Construction = Light Verb (have/take/make/give) +不定冠詞 A + Noun [V-conversion type が多い：*eg.* look / smile / argument 等]）との類似性を黒田（2011）は指摘する。次の事例は黒田（2011）に基づき、本稿筆者が修正したものである。

(12) John <u>had a close look at</u> the document.
　⇔ John <u>looked at</u> the document <u>closely</u>.
(13) The princess <u>gave him a grateful smile</u>.
　⇔ The princess <u>smiled to him gratefully</u>.
(14) She <u>had a harsh argument</u> with her husband.
　⇔ She <u>quarreled</u> with her friend <u>harshly</u>.

しかし、これらの場合には、“look is close” “smile is grateful” “argument is harsh” という意味関係が容易に成立する点に、転移修飾のもつ「概念結合の距離感」とは異なる側面を看取することができる。而して、次の例文(15)は二通りの解釈(a / b)を許容する。

(15) Kate took nice pictures.
　⇔ a) Kate took pictures nicely.
　⇔ b) The pictures Kate took are nice.

2.4 日本語表現の場合の特徴

Hall (1973)は次の Wodehouse 例文を提示することによって、転移修飾の高次元の機能としては、文法的主語との直接的関連性を持たせながらも、直近に関与する人物の抱いた感情に言及することを止めない技巧であることを評価している。

(16) It was plain that I had shaken him.　His eyes widened, and an <u>astonished</u> piece of toast fell from his grasp.

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers (JACET)

"bringing the transferred epithet into direct relation to the grammatical subject of the sentence, but preserving its reference to the emotions of the person immediately concerned" [Hall (1973: 94)]

これは転移修飾のもつ極めて情緒的・感情的効果を強調したものであると解することができるが、日本語の場合、それは主に「情意」を表わすシク活用形容詞（美しく／麗しく／嬉しく／悲しく） が体言に係る修飾語として共起するのではないかと推測される。同じ形容詞でも、主に「状態」を表わすク活用形容詞（高く／広く／狭く／少なく）にはこの機能は能わず[2)]。次の事例はいずれも黒田（2011）からの抜粋である。

(17) 私は楽しい余暇を過ごす。
　⇔ 私は楽しく余暇を過ごす。
(18) 私は気持ちよいオフロードを走り抜ける。
　⇔ 私はオフロードを気持ちよく走り抜ける。
(18′)*私は気持ちよい眼球を動かした。
　⇔ 私は気持ちよく眼球を動かした。
(19) 私はすばやい朝食をとる。
　⇔ 私はすばやく朝食をとる。
(19′)*私はすばやい周囲を見回した。
　⇔ 私はすばやく周囲を見回した。
(20) *私はすでに深い彼女を愛していた。
　⇔ 私はすでに彼女を深く愛していた。

3. 転移修飾（transferred epithet）の機能——*from Stylistics to Pragmatics*

それではいったい何のために転移修飾は使われるのか。散文より韻文に多いという現実に鑑みると、次のように文体論的効果（stylistic effect）に焦点が当てられた解説は首肯できる。

「…詩の言葉が意味の連絡性（coherence）をできるだけ減じようとする傾向をもつためであろう。普通の二次的要素を普通の形式で一次的要素に添えるときは、構文の連絡は容易であり、意味は明瞭である。これが散文の目的とするところである。しかし詩は意味の統一性（unity）と志向性（intentionality）を重んじる。たとえば一次的要素にそれと意味上十分連絡しない二次的要素が添えられた場合、それを理解するためには、二次

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers (JACET)

的要素とうまく連絡するような別の一次的要素や事物を文脈の中あるいは外に求めなければならない。この努力が構文の志向性を増すことになるのであるが、それは連絡性を犠牲にして得られたものであると言えよう。」 [佐々木 (1955: 56)]

上掲の佐々木（1955）の主張を文学的脈絡から言語学的脈絡に（文字どおり）転移させて、語用論的効果（pragmatical effect）について説明すれば、次のようになろう。

まず、表層的にはおよそ関連性がないと思われる修飾語と被修飾語により構成された名詞句を話し手（あるいは書き手）が提示することにより、聞き手（あるいは読み手）に「意味の結束性（semantic coherence）の破壊」が行なわれていることを感じさせる。ここでいう「意味の結束性（semantic coherence）の破壊」というのは、今や語用論（pragmatics）の古典的研究ともいうべき Paul Grice (1913-1988)[3] の「会話の含意（conversational implicature)」を措定するための「協調の原理（cooperative principle)」とそれを構成する「4 つの公理（four maxims)」に着目することで説明することができる。我々の日常的言語活動を支配する「協調の原理」には、それが機能するための下位規則（哲学用語では格率）と見做される「量の公理（Maxim of Quantity)」「質の公理（Maxim of Quality)」「関係の公理（Maxim of Relation)」「様態の公理（Maxim of Manner)」が過不足なく働くことが肝要であるが、名詞句における「意味の結束生の破壊」が認めれた場合には、表層的には「関係の公理」や「様態の公理」が破られて、ナンセンスな語の結合（例えば、colorless green idea のような名詞句産出）が行なわれていると聞き手（あるいは読み手）には感じられる。しかし、次の段階で、発話者（あるいは作家）が聴者（あるいは読者）に対して、破壊的ともいうべき非意思伝達行為に出ているのではなく、何らかのメッセージを伝えようとしていることに確信をもち、その前提に立つならば——すなわち、協調の原理は遵守されていると想定するならば、おのずから下位の 4 つの公理も遵守されているということになる。そこで、第三段階としては、聞き手（あるいは読み手）は「推論（inference)」を働かせ、当該名詞句を含む発話（あるいは文）が産出された場面（context）を頭の中で再構築して、実は関連性のある語を連結した意味のある名詞句であると解釈する。これにより、「意味の結束性の破壊」を感じさせた発話者（あるいは作家）の発語内行為（illocutionary act）は有意義なものとなる——すなわち、結果として、発話者の意図を高めること（to enhance speaker's intention/intentionality）につながるからである。

このような（従来は盛んに行なわれていた）英文解釈の過程は、発話者の視点の置き方と動きを正確に捉える能力——換言すれば、発話文（text）の背景にある脈絡（context）を再構築して、発話の意図を読み解く能力（語感）を涵養することに寄与する。転移され

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers (JACET)

る距離が遠ければ遠いほど、発話者の意図は高められ、それを解釈する学習者の能力も向上する。

4. おわりに

転移修飾（transferred epithet）を著述家が使う単なる文体論的手法と考えれば、その理解力は特殊な場合に限定される文学的色彩の濃い修辞的言語能力に関わる問題であろう。しかし、それを日常的言語生活に現われる語用論的手法であると考えれば、その理解力は一般性をもったコミュニケーション能力（communicative competence）の一部を形成する言語学的色彩の濃い修辞的言語能力に関わる問題ということになる。

本稿では、上掲後者の立場を明確に支持することにより、転移修飾を含む一連の英語構文に習熟することが学習者の語感を向上させることに効果的に寄与することを主張した。

最近の認知言語学研究におけるメタファー・メトニミー理論を適用した転移修飾分析も興味深く看過できないところがあるが、それについては回を改めて論じることにしたい。

註

1) Robert Anderson Hall, Jr. (1911-1997)は米国の言語学者兼ロマンス語学者であり、本文中に言及した作家に関わる The Wodehouse Society (US)の初代会長でもある。日本人研究者とはコーネル大学教授時代に接触が多かったと思われるが、戦後ガリオア資金でコーネル大学に留学した[故]鳥居次好教授が静岡大学で同僚であった興津達朗教授と共訳した『記述言語学入門』*Linguistics and Your Language* (1950/1960[2])の原著者としても知られている。

2) 日本語の古語（大和ことば）の形容詞にク活用形容詞とシク活用形容詞の二種類があることについては大野晋（2002: 129-30）参照のこと。

3) Herbert Paul Grice (1913-1988)は英国出身の言語哲学者であり、米国カリフォルニア大学バークレー校で教授職を務めた。J. L. Austin (1911-1960)の流れを汲み、日常的言語活動について、含意（implicature）の理論に依拠した“intention-based semantics”を考究した。同氏著書 *Studies in the Way of Words* (1989)で理論の全体像を知ることができる。

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers (JACET)

参考文献

Hall, Robert (1973) The Transferred Epithet in P. G. Wodehouse, *Linguistic Inquiry* 4-1.

Jespersen, Otto (1913) *A Modern English Grammar on Historical Principles II.* London: George Allen & Unwin.

市河三喜［編］(1953)『英語学辞典[増補版]』 東京：研究社.

黒田　航 (2011)「転移修飾を構文交替として特徴づける」(第 166 回メビウス研究会資料) http://www.hi.h.kyotou.ac.jp/~kkuroda/papers/on-transferred-epithets-slides.pdf

大野　晋 (2002)『日本語の教室』 東京：岩波書店.

大塚高信［編］(1970)『新英文法辞典[改訂増補版]』 東京：三省堂.

小川佐太郎 (1954)『形容詞』(英文法シリーズ 8)　東京：研究社.

佐々木達 (1955)『近代英詩の表現』 東京：研究社.

佐藤信夫，他 (2006)『レトリック事典』 東京：大修館書店.

柴田徹士・藤井治彦 (1985)『英語再入門』東京：南雲堂.

安井　稔，他 (1976)『形容詞』(現代の英文法 7) 東京：研究社.

山本幸一 (2008)「第 10 章 転移修飾現象の分析—非自立型メトニミーとしての分析」『メトニミーの認知言語学的研究』(博士論文[名古屋大学大学院国際言語文化研究科])

NII-Electronic Library Service